

漱石とヘルプス

中 島 俊 郎

1894（明治27）年、夏目金之助、漱石は、洋書販売会社である丸善へ *Helps's Essays Written in the Intervals of Business* というタイトル（以下、『ヘルプス随想録』と略記する）のもと、英語教科書の翻刻を依頼して発行した¹⁾。さらにその2年後、1896（明治29）年、嘱託教員であった愛媛尋常中学校の校友会誌『保恵会雑誌』に「アーサー・ヘルプスの論文」という題目で、ヘルプスの伝記的な側面、文体、著述にふれ、さらに「秘密」の訳文を加えた一文を投稿している²⁾。

ヴィクトリア朝時代、ヘルプスは政府の高官にしてヴィクトリア女王がもっとも信頼をよせた一人であり、同時代の多くの文学者からも高い評価を受けていた、小説、戯曲、評論をものする文学者でもあった。その人間性、文体は、時代を代表する美術批評家であり社会改良家のジョン・ラスキンから激賞されていたのである。ラスキンがこのような高い評価を下した同時代の文人はトマス・カーライル以外、ヘルプスのみであった³⁾。

ところが逝去した1875年以後、20冊以上の著作があるにもかかわらず、ヘルプスの名前はイギリス本国でも忘却のかなたへ押しやられてしまい、ヴィクトリア朝文化研究の周辺をいろいろマイナーな存在でしかなくなっていた。社会史、政治史をとまなう歴史、文化研究の場でヘルプスが研究対象として再評価が開始されたのは、ごく最近のことである。だが、これは漱石研究においても同様であり、ヘルプスは漱石の蔵書目録にのみ、その名前はとどめられていたに過ぎない。だが、最近、ヘルプスに関する資料が新しく発掘され、研究の地平が新たに拓かれようとしている。

そこで本稿では、ほとんど未紹介であったヘルプスの人物像を素描し、合わせて漱石が編纂した教科書の内容を詳しく検討し、英語教師、漱石が英語講読から何を習得し、発信しようと考えていたかを追究し、最後に漱石、ヘルプス両者が発する意義を解明してみたい。

I アーサー・ヘルプス

アーサー・ヘルプス（Arthur Helps, 1813-1875）は1813年7月10日、サリー州のバラムヒルで父トマス・ヘルプス（Thomas Helps, 1772-1842）と母アン・フリスケット・ブラックネット（Ann Frisquet Plucknett, 1777-1851）の間に、四人兄弟の末子として生を享けた。父親はロンドンのセント・バーソロミュー病院で会計員を務め、ロンドンの参事会員であり、母は牧師の娘であった。

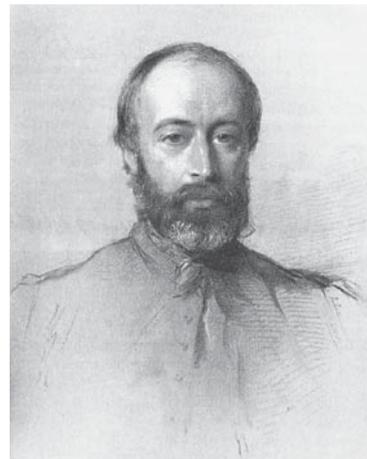


図1 ジョージ・リッチモンド画、
『アーサー・ヘルプス』（1858）

アーサーはパブリックスクールの名門イートン校で学び、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジへ進学、1835年に卒業し、1839年に修士号を得て、また1864年6月8日、オックスフォード大学より博士号を与えられている。1836年8月27日、アイルランドのエドワード・フラーの娘エリザベスと結婚し、その時にはメルボーン内閣の大蔵大臣トマス・スプリング・ライス（後のモンティエグル卿）の秘書官であった。そして1839年から政府が倒れる1841年8月までアイルランド省の首席秘書官モーベス卿の私設秘書を務めた。1843年、父から財産の遺贈をうけてハンプシャーに3000エーカーもある広大な敷地を購入し、その地所に建っている

たヴァーノンヒルという邸宅に身をおき、そこで多彩な文筆活動を展開し、コレラ禍に対処するなどの社会改良運動にも没入していった。

文筆活動としては、まず歴史家としての側面を紹介しておこう。スペインのアメリカ進出と征服について『新世界の征服者』(1848)、『スペインのアメリカ征服』4巻(1855-61)などの好著を出版した。とりわけ後者はスペインに長期滞在し、資料を渉猟して書きあげた労作である。こうした史書の副作物として、『バルトロメ・デ・ラス・カサス』(1868)、インカ帝国征服者を描いた『ピサロ』(1869)、『コロンブス』(1869)、アステカ帝国の征服者『エルナン・コルテス』(1871)などの伝記を著わし、好評であった。

漱石が教科書にした『ヘルプス随想録』(1841)が書かれたのは、ヴァーノンヒルへ移転した後であったが、タイトルにある「業務の間に書かれた」とあるのは、政府の公務と文学活動の狭間に身をおいていたヘルプスの状況を示している。文学作品としては小説、劇などを何篇か著わしたが、『対話する友人たち』(*Friends in Council*, 1847-49, 1859)はヘルプスの文学作品のなかでもっとも永く生命力を保っている。想像上の人物同士のあいだに、社会、政治、文学などの話題が展開されていき、対話体による文学作品となっている。この作品の成功にはヘルプスのふたつの体験が付与されているのだが、ケンブリッジ大学時代、1820年に設立され今日まで存続している秘密結社、使徒会の一員に選出されていた。詩人テニソン、哲学者ラッセル、ヴィトゲンシュタインなど錚々たる人士が会員であった。弁論が鍛えられたさらなる体験は、ヴァーノンヒルがサロンとなり、グラッドストーン、トマス・カーライル、ジョン・ラスキン、チャールズ・キングズリーなどのヴィクトリア朝時代を代表する政治家、文人などとの交際から得たものであった⁴⁾。1860年6月9日、王室の顧問員となり、アルバート殿下の講演録をまとめ(1862)、また女王の『スコットランド日記』(*Leaves from the Journal of Our Life in The Highland* [1868])を編纂した。

ヘルプスの人間性にも触れておこう。ヘルプスの娘による父の思い出が残されているが、そこには親子の他人を寄せつけない濃密な空気が流れている。ヘルプスは美に対する洞察、直観力にあふれていたが、芸術にはそれほど興味がなかったようだ。また自然については、荘厳なアルプスの高峰よりもおだやかなイギリスの風景、とりわけ森や丘陵を好んでいた。それはヴィクトリア朝のごく一般的な美意識ではなかったか。

音楽はかなり愛好していたが、思考を整え、活性化してくれるため好んでいたのであろう。だから厳格な古典音楽よりも旋律の快い、美しい音楽を好んでいたという。

個人的な嗜好は単純そのものといっていいくらいであった。飲食についてはそれほど関心がなく、身を飾ることなども全く興味を示さなかったという。衣食に対するこうした無関心さは家族の間に時折、波風が立ったらしい。とはいえ、年齢を問わず人をもてなすのは好きであったらしく、1860年代、ヴァーノンヒルの邸宅で文学者をはじめ高名な人々を招待して歓待したが、それは人里はなれた閑静な近隣の家々とはきわめて対照的であった⁵⁾。

公的な仕事に退屈はつきものだが、そうした単調な公務への潤滑油でもあったのか、ユーモア感覚は研ぎ澄まされていた。怒りをユーモアでつつみ込むような一件が即座に思い出される、と散歩中に大雨に襲われた出来事を娘は一挿話として語っている。雨にみまわれて全員がずぶ濡れになり、途方にくれていると小さな駅が目に入った。そこで雨宿りをしようということになり、駅舎のドアに手をかけたがまったく動かない。扉を強くたたき、大声を駅舎の中に投げかけてしばらくしてから駅長がゆっくりと姿を現した。窓越しにずぶ濡れになっているから中へ入れてくれと懇願しても、駅長は頑として扉を開けようとはしない。その非人間性に堪忍袋の緒が切れた父は、痛罵の限りをつくし駅長を非難したが、ポツリと一言、雨にぬれて寒い、と言うところを、「君、悲しくて人間性が震えているのだよ」とこぼした。あつけにとられた駅長の顔を見て一同は笑いをこらえられなかった。父の一言に圧倒された駅長は一行を駅のなかへ招き入れたのであった⁶⁾。ユーモアと諧謔が入り混じり、まさにヘルプスの面目躍如である。

接見中に悪寒をおぼえ、1875年3月7日、ヘルプスは胸膜炎を起こしロンドンのローワー・パークレー通りで死去した。1875年5月4日、公務への永年の尽力に対して遺族に年金200ポンドが付与された。

II 『ヘルプス随想録』の構成と内容

漱石の教科書は忠実にマクミラン版を翻刻したもので、右下にあるマクミラン社のマークを除いては字体からその配置まで寸分たがわない。教科書の表紙上タイトルの下に Rowe and Webb と大書されているのは、本テキストを編纂し、注釈をほどこした編注者ふたり

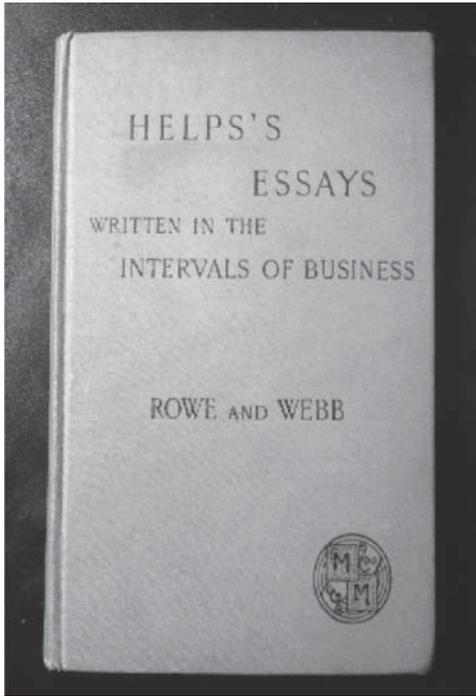


図2 『ヘルプス随想録』

の名前である。前者の Rowe は、フレデリック・ジェイムズ・ロウ (Frederick James Rowe, 1844-1909) のことで、カルカッタにあるプレジデンシー・カレッジ (Presidency College) でイギリス文学を講じて、桂冠詩人テニソンの諸作品に対して語注、解釈をつけた注釈本を数多く出版している。もうひとりの編者であるウィリアム・トレゴ・ウェブ (William Trego Webb, 1847-1934) もカルカッタで教鞭をとる英語教師であり、イギリス文学作品に注釈をつけた参考書を多数残している。この両者には共注書以外の著書として『英語研究法』などもある。

漱石の教科書は、「マクミラン版英文学古典叢書」(McMillan's English Classics) の一冊として出版されたものである⁷⁾。この叢書は、チャオサーの『カンタベリー物語』から現代文学まで英文学の名作を200点以上網羅し、英語学習者にテキストを提供している。『ヘルプス随想録』の序文の注において、ヘルプスの他の著作を列挙し「インド人の英語学習者用に対しても有益である」と付言されている例を見ても分かるように、主に大英帝国の植民地において英語を教授する目的で編まれた教科書と言ってもいい。明治期からわが国でもこの叢書は親しまれ、使用されていた。

まず『ヘルプス随想録』の構成と内容を素描しておきたい。構成は大きく二部からなり、第1部は第1章から第7章までであり、「実務上の智慧」、「安心立命」、「自己修養」、「人物判断」、「家庭の規則」、「助言」と

各テーマが論じられ、漱石が訳出した「秘密」は第7章にある。続く第2部の内容は、冒頭に引用されたベーコンの『学問の進歩』(1605年)から引用された一節に概略はほぼ尽されている——「仕事を処理する知恵はまだ書物のかたちにとめられていない。こうした状況は学問自体、また教師にとって不名誉以外の何ものでもない。このため学問と知恵の両者に連携がないと思われるような所見、表現が生まれているのである。社会生活に不可欠な三つの知恵のうち、行儀の知恵は徳に劣り、思索の敵であると見なされている。また統治の知恵は学者も必要があればうまくやってのけられるが、それはごく少数に過ぎない。だからこうした欠を補う書物が書かれるならば、学問のある人々は、乏しい経験しかなくても、逆に学問のない人々をはるかにしのぐであろう」(第2部、23・4)。そして、ヘルプスは第9章から第15章まで持論を展開していくのだが、テーマは第10章「ビジネス業務の処理」、第11章「代理人の選定と管理」、第12章「懇願者の取り扱い」、第13章「会見」、第14章「評議会、委員会、理事会」、第15章「党派」というように実務的なテーマが論じられる。総体的にビジネスの実践面が取り上げられている。たとえば第9章「ビジネスマンの養成」では、1. ビジネスマンに不可欠なのは、真理を求める心、博愛心などのモラルである。2. 然るべき良きモラルを体得し、その次に自己が立つ原理、原則を確立しなければならない。当初、こうした原理は脆弱なものでしかないが、真理をたえず希求していけば原理のなかにひそむ誤謬を排除していけるはずだ。3. 希望を信じ、穏健な性質を維持すべきである。生来、こうした性格が備わっていても、勉学により不備を矯正できよう。4. 実務に必要な決断力は、幼少時代から自力で判断する習慣をつけておくとかかなり養われるものである。5. 幾何学と形而上学は習得しておくべきである。多様な学問分野の知識を身につけておくとか知力は機敏になるものだ。6. 有益な書物でもって学んでおれば、学生時代から社会人への移行は円滑に運ぶ。ベーコンの『随想録』などは推奨できよう。7. 何を学ぶべきか、という問題よりもいかに学ぶかという態度こそが重要である。学習法こそ肝要である。8. 軽快に書く術を習得すべし。9. ビジネス文書の文体は簡潔にして正確であらねばならない。文章上の反復は入念に回避する必要がある。10. ビジネスマンの心得——各人の意見に耳を傾け、どのような主張にも耳をかさなくてははいけない。勇気を持ち、忍耐力をきたえなくてはならない。強い想像力をもつべきだが、制御する術も

体得しておくべきである。強い責任感こそが前提となる——精励、的確さ、思慮深さなどの美德は責任感から生じるものだからである。以上のようにビジネスの精神論から実務面まで幅広く論じられているのが分かる。

『ヘルプス随想録』は、注釈のなかでフランシス・ベーコン(1561-1626)の『随想録』(1597, 1612, 1625)からの引用、比喩例がもっとも多く参照に付されている。『ベーコン随想録』のなかの「勉学」、「談話」、「礼儀と挨拶」、「派閥」などの項目において、哲学者ベーコンは生活知、人生訓ともいえる精神の「教養」について想いをめぐらせた。人生の諸相を綿密に観察し理性の力で鋭い洞察をこらした30篇以上に及ぶベーコンの処世訓は英語散文の粹と仰がれ、時代を超えて読みつがれてきた。ヘルプスは明らかにベーコンの哲理を学び、忠実に敷衍させている。漱石はベーコンの『随想録』を熟読していて、『猫』以後の小説のなかでも頻繁に引用、言及している。こうしたベーコンへの傾倒があればこそ、漱石はヘルプスのなかに同質のものを見出したのであろう。また警句を愛好してやまない漱石がヘルプスのアフォリズムに類縁を認めたのも故なきではない。そしてベーコンの『ノウム・オルガヌム』(1620)は人生、自然の観察を簡潔にアフォリズムのかたちで記したものである。

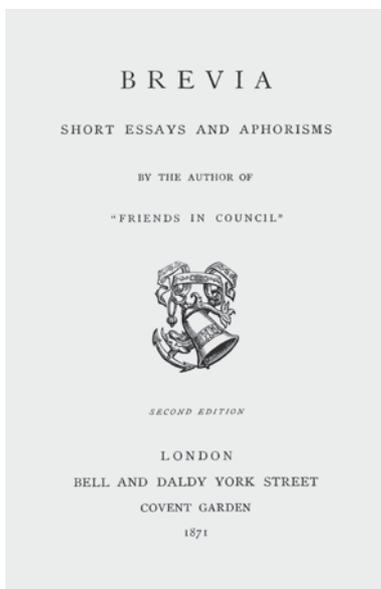


図3 アフォリズム集『ブレヴィア』(1871)

III 漱石の「アーサー・ヘルプスの論文」

さて、「アーサー・ヘルプスの論文」は著者紹介からはじまるが、まずこの冒頭部分は大半がマクミラン

版の「序文」を書いた編者の記述を要約し、そのまま訳出したものであり、漱石自身の考えではない。例えば、漱石はヘルプスについて、「社会の改良を以て畢生の目的とし常に貧苦困厄の徒を助けて幸福の境に誘うことを力め、十数巻の著書主として慈善親愛のことを説かざるもの寡なし」と述べ、「博愛主義」は人間だけでなく、「禽獣虫魚」にまで及ぶと書いている。この該当部分は、“Helps’s distinctive work was that of a social reformer, his constant object being the elevation of the poor and helpless classes of the community; and, as a means to this end, he continually aimed at arousing the interest of the cultured and influential sections of society in the condition of those less fortunate than themselves.”に相当し、一字一句まで変わらない。

また、漱石はヘルプスの文体について「沈着温籍、毫も急促の調なく奇矯の辨なし、論ずる所叮嚀親切、反対者と雖も遂に執拗の腰を打って首肯せざるを得ざるにいたる」と説いているが、これも漱石自身がヘルプスの文体に判断を下した言葉ではなく、序文にある二人の編者による指摘をそのまま訳して記しているにすぎない。当該部分は以下の“…the reader can hardly fail to notice in Helps’s style a quiet smoothness (rather than strength), an absence of dogmatic statement and a desire to find favourable points even in those opposed to him”を指す。漱石の言う「沈着温籍」とは“a quiet smoothness”に相当し、「温籍」とは一般に心が広く、包容力があり、やさしいという意味であるが、ある面ではヘルプスの文体を深くとらえている表現である⁸⁾。「急促の調」という言葉は、“strength”に対応するのであるが、「あわただしく、せきたてるような」という意味を含む。「急促」に対して、「温籍」と説く漱石の表現はヘルプスの文体の一面を的確にとらえている。「奇矯の弁なし」という訳語は“an absence of dogmatic statement”に相当している。また「反対者と雖も遂に執拗の腰を打って首肯せざると得ざるに至る」という表現こそ、まさに漱石らしい訳語といえよう。この該当部分の英語は、“a desire to find favourable points even in those opposed to him.”であるが、「執拗の腰を打って」という補足的な訳語は、前後を勘案してよく練られた表現になっているからだ。

ロンドンで出版されたヘルプスの教科書は注釈の部分が全132ページ中、ほぼ半分にまで及んでいる。本文が62ページあり、残りは注釈である。注釈部分の前にその章全体の論旨をまとめた要約文が掲げられている。たとえば、漱石が訳した「秘密」を例にとると、

要約文 (summary) が掲げられ、「秘密を厳守することはわざわざ断らなくても前提となっている。交際の中で耳にしたことを他言するのは、相手への裏切り行為であり、愚かだと言わねばならない。そもそも人と人が交わす会話は信頼関係の上に成り立っているからだ。だから人から聞いたことを他言するのは、自らの人間性を卑しめることに他ならない。というのも、伝聞したことが広く世間に伝わってしまうのだから」と、第1パラグラフから第3パラグラフまでをまとめ、さらに「でも、無意味に隠し立てするのは誤りと言わねばならない。疑心暗鬼な人間の用心深さかもしれないが、決して賢明なことではないであろう。人の気持ちを考えたうえで、秘密を打明けるか、打明けないかを決めなければならない。秘密が公になったとき、じつは今まで口外することを禁じられていたと吹聴するのも、信頼関係を無にすることでしかない」と要約し、ついで「謹厳で、見識のある人物、また守秘義務のある仕事に携わっているものこそもっとも信頼をおくに足りる。だが虚栄を張るような人物、浅薄な人間は信頼できない。というのも前者は秘密を見栄として考え、後者はふとしたはずみでもらしてしまう恐れがあるからだ。また、ためらわず秘密を明かしてしまうような無邪気な人物もまた信頼できないのは同断である」と結論づけ、最後に「ささいな秘密こそ多大な注意を要する。たえず秘密が守られるとは限らないからである。また時として親友に対しても秘密を打明けないほうが賢明な場合がある。過去の心痛を思い出して心を苦しめられるからだ」と補足している。『随想録』の各章注釈の冒頭部にはこうした要約がおかれている。

次に注釈部分だが、本文のテキストには10行ごと「行数」がつけられていて、その箇所に対応して、文字通り、各行ごとに注がつけられていく。たとえば、5行目 (“in any outpouring of his heart”) については、

5. **in any outpouring of his heart**, when he freely communicates his deepest feelings.

という第5行目にある原文の難解な意味を言い換えて、分かりやすい表現にパラフレイズしている。まず英語学習者に対して文意を理解させようとする原則でもってつらぬかれているため、注釈部分は、大半の文意が忠実にパラフレイズされている。だが、179行目 ‘manner’ の注のように、‘behaviour’ と言い換えたあとで、ハムレットがホラーショーに誓いを立てさせようとする、シェイクスピアの作品の場面を引用して、

言及されている箇所の理解をさらに深めようとする工夫もこらされている。

次にヘルプスの英語原文と、漱石の「秘密」訳文を括弧でくくりを比較・参照できるように並置しておこう⁹⁾。ただ一部の表記を読みやすいように改変したことを断っておきたい。

For once that secrecy is formally imposed upon you, it is implied a hundred times by the concurrent circumstances. All that your friend says to you, as to his friend, is entrusted to you only. Much of what a man tells you in the hour of affliction, in sudden anger, or in any outpouring of his heart, should be sacred. In his craving for sympathy, he has spoken to you as to his own soul.

[一たび他人より此事は秘密にして呉れよと頼まれたる以上は其時限り秘密にさへすれば夫で済むと思ふは僻事なり、百遍でも二百遍でも一様の事情の下には必ず此秘密を暴露すべからず、汝の知人が汝を朋友と思ひたればこそ打明る事は只汝のみに打明る也、窮厄して進退谷まるの時、激昂して一時に怒りたる際等、凡て己れの心底を腹藏なく人に話し盡す場合には其片言隻辭皆神聖なるもなり、彼れ他の同情を得んとするに急なり、霊府の秘鑰を断って汝に其肺腑を示すの時なり。]

To repeat what you have heard in social intercourse is sometimes a sad treachery; and when it is not treacherous, it is often foolish. For you commonly relate but a part of what has happened, and even if you are able to relate that part with fairness, it is still as likely to be misconstrued as a word of many meanings, in a foreign tongue, without the context.

[普通の交際場裏にて聞き得たることを觸れ廻るは、時として悲しむべき詐偽を演ずる事あり、仮令詐偽に至らざるも大抵は馬鹿気たる事多し、汝の觸れ廻るところのものは概して事実の一部分に過ぎず、たとひ其一部分を些少の誤謬なく伝播し得たりとて、前後の関係なくして實然外国語の意義を模索するが如く遂に誤解を生ずるを免かれざらん。]

There are few conversations which do not imply some degree of mutual confidence, however slight. And in addition to that which is said in confidence,

there is generally something which is peculiar, though not confidential; which is addressed to the present company alone, though not confided to their secrecy. It is meant for them, or for persons like them, and they are expected to understand it rightly. So that when a man has no scruple in repeating all that he hears to anybody that he meets, he pays but a poor compliment to himself; for he seems to take it for granted that what was said in his presence, would have been said, in the same words, at any time, aloud, and in the market-place. In short, that he is the average man of mankind; which I doubt much whether any man would like to consider himself.

[瑣末の談話にても主客の間に幾分かの信用を存せざるものは寡なし、主客を信ぜず客主を信ぜざれば大概の談話は出来ぬものなり、加之談話と云ものには其場合限りにて決して他時繰返すべからざる特別の話柄なきにあらず、此人なればこそ話しもすれ他の人なれば黙して居るべきにと云ふ場合なきにあらず、是相手の分別すべき処なり、故に何でも蚊でも己れの聞きたる事を悉く人に吹聴するは私は馬鹿で御座ると人に広告するに異ならず、一度己れの聞き得たる事は聞た通りを何時でも市上にて公言して差支へなしと信ずるものなればなり、是を平凡の人といふ彼自ら甘んじて平凡の人となる快よき事にもあらざるべし。]

On the other hand, there is an habitual and unmeaning reserve in some men, which makes secrets without any occasion; and it is the least to say of such things that they are needless. Sometimes it proceeds from an innate shyness or timidity of disposition; sometimes from a temper naturally suspicious; or it may be the result of having been frequently betrayed or oppressed. From whatever cause it comes, it is a failing. As cunning is some men's strength, so this sort of reserve is some men's prudence. The man who does not know when, or how much, or to whom to confide, will do well in maintaining a Pythagorean silence. It is his best course. I would not have him change it on any account; I only wish him not to mistake it for wisdom.

[之に反して世の中には年が年中入らざる事にま

で秘密を守りて嘗て打解たる事なき人あり、かゝる輩は単に無用の長物なるのみならず時として有害の毒物なり、斯様な風習は時として天稟の引込み勝なる性質より生じ、或は心情の怯懦なるより起り、或は持前の猜疑心より発し、或は屢他人の為に欺瞞せられ束縛せられたるに起因す何れにもせよ欠点に相違なし、去れども或るものは狡猾を以て其城壁と心得るが如く此輩は打解ぬ沈黙を以て処世の用心となす事あり、尤も如何なる人に胸中の如何程を打ち明すべきか見当の付かぬ様な者は「ピサゴラス」的沈黙を守るが上策なるべし、斯様な人は飽迄も沈黙を守るべし、只是を以て智者の行為と思ふ事なからん事を望むなり。]

That happy union of frankness and reserve which is to be desired, comes not by studying rules, either for candour or for caution. It results chiefly from an uprightness of purpose enlightened by a profound and delicate care for the feelings of others. This will go very far in teaching us what to confide, and what to conceal, in our own affairs; what to repeat, and what to suppress, in those of other people. The stone in which nothing is seen, and the polished metal which reflects all things, are both alike hard and insensible.

[快豁と沈黙を都合よく調合するは吾人の最も望む所なれど、こは淡泊の規則とか用心の條令とか云ふものを設けて研究したりとて到底造詣し得べきにあらず、此境界に至らんと欲せば先づ自己の目的を公明正大にし、而る後他人の感情を傷けぬ様之を慎重するの念慮を以て此目的を發揮し来るべし、此の如くなるときは自己頭面上の事に関しては、如何なる事を打明けてよきや又如何なる事は打明て不可なるや自ら明白になるの期ならん、他人の事に関しても、是は吹聴してよき事は秘密にして置くべき事と、自然合点が行く様になるべし、暗黒なる石燦、爛たる玉、共には無情なり、何れも思ひ遣りなき死物なり。]

When a matter is made public, to proclaim that it had ever been confided to your secrecy may be no trifling breach of confidence: and it is the only one which is then left for you to commit.

[或る秘密事件が暴露せる時、實は彼の事件は疾くから知って居たれど、内々にして置いて呉ると依

頼された故、今迄口外せざりし杯いふは人の信用を無にする所為にて甚だよろしからず、かゝる場合にかゝる言をなすは信を破る唯一の道なるべし。]

With respect to the kind of people to be trusted, it may be observed that grave proud men are very safe confidants: and that those persons, who have ever had to conduct any business in which secrecy was essential, are likely to acquire a habit of reserve for all occasions.

[己れの信用せんとするものは厳格にて自重心ある人にして、嘗て秘密を守らねばならぬ事業に當つて其道には経験ある人を擇ぶ事安全なるべし。]

On the other hand, it is a question whether a secret will escape sooner by means of a vain man or a simpleton. There are some people who play with a secret until at last it is suggested by their manner to some shrewd person who knows a little of the circumstances connected with it. There are others whom it is unsafe to trust: not that they are vain, and so wear the secret as an ornament; not that they are foolish, and so let it drop by accident; not that they are treacherous, and sell it for their own advantage. But they are simpleminded people, with whom the world has gone smoothly, who would not themselves make any mischief of the secret which they disclose, and therefore do not see what harm can come of telling it.

[又一方にては愚人軽薄才子の爲め、如何なる都合にて秘密が逸早く世上に暴露せらるゝの恐れありやと考ふるも又一問題なり、世には秘密を弄ぶ者ありて遂に機敏にて少しく事情を知るものに観破せらるゝに至る事あり、かゝる才子は秘密を己れの飾りの如く心得る事、恰も田舎漢が己れの懐には金時計があるぞと云はぬ許りの顔付きをして、遂に盗兒の爲めにあたら貴重の物品を奪はるゝが如し、是等の人々は固より秘密を託するに足らねど、其外にも剣呑なる人なきにあらざり、固より馬鹿にあらざれば不用意の際に秘密を取り落す気づかひもなく、悪物にあらねば金の爲に秘密を売る心配もなしさらば如何なる種族の人ぞといふに、只淡泊にして而も今迄世波の險悪なる事を知らず、己れ秘密を知りながら之を利用するの方を知らねば、よしや他人に話したりとて少しも害はあるまじと

思ふ様な人物なり。]

Before you make any confidence, you should consider whether the thing you wish to confide is of weight enough to be a secret. Your small secrets require the greatest care. Most persons suppose that they have kept them sufficiently when they have been silent about them for a certain time; and this is hardly to be wondered at, if there is nothing in their nature to remind a person that they were told to him as secrets,

[秘密を打明るに先だつて、汝の注意すべきことは其他に告げんとする事の果して秘密にすべき程重大の事件なるや否やの点なり、些少なる秘密は最大の注意を要す、多数の人は多少の時日を経れば最早発表しても差支あるまじと思ふに至るべし、若し汝の打ち明る事情にして秘密とすべき程の性質を有せざる以上は、人よりよく思はれても是非なき事なり。]

There is sometimes a good reason for using concealment even with your dearest friends. It is that you may be less liable to be reminded of your anxieties when you have resolved to put them aside. Few persons have tact enough to perceive when to be silent, and when to offer you counsel or condolence.

[時としては汝の親友にさへ、隠して置く方都合よき事あり、最早此事は考へまじと決定せる時、不意に忘れて居る事を引張り出さるゝの恐れあればなり、如何なる場合には汝を慰め、又如何なる折には知らぬ顔をして居る方がよきや、此勘を心得て居る者は百人に一人あるのみ。]

You should be careful not to entrust another unnecessarily with a secret which it may be a hard matter for him to keep, and which may expose him to somebody's displeasure, when it is hereafter discovered that he was the object of your confidence. Your desire for aid, or for sympathy, is not to be indulged by dragging other people into your misfortunes.

[不必要なる場合に秘密を守り得ぬ人を知りながら心事を打明るなかれ、恐らくは暴露したる時、彼をして人の怒を買はしむるに至らん、他人に対して援助を求むるはよし、同情を得んと欲するはよし、他人をして汝が不幸の御招伴たらしむるは

不可なり。]

There is as much responsibility in imparting your own secrets, as in keeping those of your neighbour.

[他人の秘密を守るに責任あると同じく汝の秘密を打明るにも責任あると思へ。]

漱石の訳文は、「ピタゴラス的沈黙」など直訳調の訳語が当てられているようなところもあるが、逆に「金時計があるぞと云わぬばかりの顔付」などの訳語に見られるように、いかにも『猫』の作者らしい豊かな表現も散見される。漱石はこの言いまわしを好んでいたのか、『文学論』（明治40年）のなかでも用いている（「金製の時計は持主の豊かなるを示し得べしと雖ども、其針の正確を証するに足らざると同理なり）。

『ヘルプス随想録』は英語学習の講読に資するために作成されたと思われるが、漱石は「訳読」という教授法に独自の見解をいだいており、日本人の英語力の涵養から論じて日本の国家観まで射程に入れるような英語観をいだいていた。漱石が教師、教科書、学習者に各視点をおいて英語学習について考察した見解¹⁰⁾は、『ヘルプス随想録』を理解するうえで裨益するところが大きい¹¹⁾。

まず漱石は「教科書の問題」として、日本の中学生が習得する語彙のアンバランスさを指摘する。サミュエル・ジョンソンの小説『ラセラス』（1759）に頻出する難しい語句を習わずにいられない現状を回避し、外国の新聞、たとえば『ロンドン・タイムズ』、『デイリー・メール』などをもとにして「如何なる文字」が「多く繰返され」るかを統計にとり、必要な語句、言いまわしを選択して「組織立てて教科書を編集する」ことを漱石は推奨する。一年間のうち、「何百遍となく繰返される」語句に「重きを措き」、そうした表現を「教科書中に幾度も繰返しておく」ようにし、「半年に一度位しか見当たらないものは全く省く」方針をとる。つまりこのように語句の選択をしていくと、「経済的に秩序だった系統の下に編成され」た教科書ができるというわけである。そして「十年に一度宛改版」をして、たえず教科書の内容を活性化させ、学習者の便に資するというのが、英語教育の中で使用する教科書に対する漱石の方針であった。

ただ教科書を使う「教師」側に問題があつてはこうした教科書も生きてこないと漱石は指摘する。つまり、教師も教科書と同じく点検をおこたらず、というわけである。そこで漱石は、「全国の中学の英語教師の試

験」を随時、文部省で実施することを提案する。「二年に一度位」は、試験をして「昇給増俸の道を講じる」策に活用するというのである。こうでもしなければ中学の教師は、「勉強しようという気は丸でなく鳴らして仕舞う」ゆえ、「生徒も不幸であり、本人も気の毒である」という。さらに漱石は教師側にのみ責任を押しつけず、教員のモチベーションの強化という意味で、試験官を文部省におき、教員にとっての「修養上その忠告者」となり、「教授上の不審」、「疑義」などの問い合わせに応じ、さらに新刊の学習書の案内などもしてたえず連携をとるようにすればいいと提案する。

次に漱石は「教授法」へと論を進めていく。漱石は英語学習の時間を「文法」、「会話」などと細かく分割する方法は退けるべきであると考えている。独立した科目として語学を教えるのではなく、「臨機応変」にとらえて、「知識のない生徒」のためには専門的な区別をつけない方が良くと進言する。漱石のこうした考え方の根底には、専門的に区分してしまうと、「有機的統一のある言語」を解体してしまうだけで、漱石の比喩をかりるならば「区別しがたきまで一気に活躍せる肉体を切り離して、神経の専門家、胃腸の専門家、呼吸器の専門家を作るようなもの」にはかならないと結論づける。「どうしても各自が互いに連絡のつくように教え込んで行かなければならない」というのが漱石の持論で、『ヘルプス随想録』を教える際にも実践されていたと思われる。この教科書は訳読用として使用されたはずだが、漱石にとって「訳読は（文法の）活用問題のようなものであり、「文法を離れて譯はなく、譯を離れて文法はない」からである。作文、会話、読み方などを各々、独立させて教えることは、「大弊害である」と漱石は厳しく難じている。だから漱石は「アーサー・ヘルプスの論文」という一文において、「秘密」を訳例として示しているのだが、翻訳は漱石のなかでは何も日本語の意味のみに特化されているのではなく、ヘルプスの英語のなかに文法事項を確認し、さらに著者との対話をも含めているのである。漱石のいう「有益の書なり」とは、以上のような側面すべてを含めた評価であると考えてのが妥当であろう。

ヘルプスの翻訳「秘密」について漱石のうちに去来していたのはこうした語学学習上の問題だけではない。当該のヘルプス教科書は、植民地インドにおける英語学習用の教科書として、作成されていた事実を漱石は熟知していたはずである。インド人の二人の編纂者が書いた「序」において、「こうしたヘルプスの著述は

インド人英語学習者に資すところであろう」という文言がはっきりと明記されているからである。英語のテキストに英語の注釈をほどこした学習書は、漱石が英語を学んだ時代には当然視されていたという。「吾々の学問をした時代はすべての普通学は皆英語で遣らせられ、地理、歴史、数学、動植物、その他の如何なる学科も皆外国語の教科書で学んだ」、つまり「英語ですべての学問を習ふと云った方が事実に近い位」であった。ところが漱石にとって、近代化が進んだ日本、とりわけ「独立した国家という点から考えると」、英語で書かれたものを英語で考えるというのは、「一種の屈辱」に他ならず、日本もまた「英国の属国印度といったような感じが起」きてくるのである。隷属意識を排すべきであるという漱石がここで重要視しているのは、「日本の nationality」の問題であるのは言うまでもない。漱石があえて日本語にせず、‘nationality’ と英語表記のままでも問い返している意味は重い——「日本の nationality は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換できるはずのものではない」と強く促してやまないからである。

こうした漱石の語学への学習態度そのものは、学問一般へと敷衍していく。「学問は普遍的なものだから、日本に学者さえあれば必ずしも外国製の書物を用いなくても、日本人の頭と日本の言語で教えられぬというはずはない」と喝破し、「たとえ翻訳でも西洋語そのままよりも可いに極っている」と断定する¹²⁾。漱石は、国家の独立と近代化とが二律離反せざるをえなかった日本の現状を縮小化したかたちとはいえ、語学学習という問題を介在させつつ、はっきりと指摘しているのである。ここに小説家、漱石が後年に自らの小説においてテーマとし発展させていく問題が顕在化しているはずである。

IV 教室のヘルプス

漱石がヘルプスの教科書を教室で使用していた熊本五高（第五高等学校）での授業風景を伝える一文は『ヘルプス随想録』の内実をより鮮明にしてくれる——「僕が（二十年前熊本五高にいたころ）横着な僕は、股倉に辞書をはさんで——先生が一学生の読訳した後を再び丁寧に講釈しつつある頁の——次の頁の字を引いていると『君は、どちらの頁を見ているんです。下読みしてないけりゃお帰りなさい。教場からお出なさい。教師の吾輩でさえ下読みをしてくるのに、生徒の分際で』と叱られた事を今に忘れる事ができな

い」¹³⁾。20年前の高校生時代を振り返り書かれたこの記事は、教室での漱石の授業ぶりを伝える貴重な証言である。生徒は授業時間においてすすむ教科書の当該箇所を予習してこなければならず、それを怠ると叱責されることが前提になっている。「教師の吾輩でさえ下読みを」という発言は、「吾輩」の潤色にも思えるのだが、漱石が授業にいどみ、きちんと自らも予習していることがうかがわれる。当然、生徒側にも予習が求められるわけであるが、注目すべきは講読の仕方である。まず、教科書を生徒に読ませて訳をつけさせる。その次に誤りなどを正し、漱石自らが文法や語句の用法などを説明するという訳読法を採用しているからである。

生徒が訳し終えた後に漱石が行った「解説」について、前任校の松山中学での授業風景が生徒の手によって記録されているが、それは微に入り細を極めたようだ。漱石はまず教科書として、*Sketch Book* を用い、そのなかの‘Voyage’、‘Broken Heart’などの三章を教えた。「其の講義ぶりは机に凭れて両肘をつき、右手に鉛筆を持って細々と講義を進めて行かれた」という証言からも漱石が一行一句をおろそかにしない教師であったことが判明する。また、教師にとって、「声」や「話しぶり」は生徒に教えることが伝わるか伝わらないかを定める大きな要素となるのだが、漱石の「声」は、「能弁とか達弁とか言うのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶりで誠に明快を極め、熱心で正確」であり、その教室に出ていた者は、「口吻が当時十七、八歳だった自分の脳裡に刻せられて今だにありありと這っている」ほどに印象が深かったようだ。そして問題の「解説」についてであるが、「先生の英語の教授法は訳ばかりでは不可なり Syntax と Grammar をはじめ言葉の排列の末まで精細に^{けんかく}険覈しなければならぬと言うので、一時間にわずかに三、四行しか行かぬこともあった」という¹⁴⁾。

このように語学の微細な点にまで漱石の授業は及んでいくため、「二年間に *Sketch Book* 三章しか読了しなかった」のであった。何ひとつ疎かにしない漱石の授業態度について、「prefix, suffix を始終やかましく言われるので夏目さんの prefix, suffix と行って吾々の間に通っていて」、生徒間で揶揄の対象になったようだ。だが、遅々として進まないこの教授法が自らの研究法をつちかう礎となった生徒もなかにはいたのである。「私にはこの根本的な語学研究法が後々まで永く感化を遺して、いくら役に立ったか知れない」と学恩を包み隠さずに吐露している。後年、この生徒は漱石

との出会い、松山の懐旧談なかで、「その感化」ぶりに話しが及ぶと、漱石は、「そうだ、だが、僕はそんなに恩をさせたとも思っていないのに、君はそんなにありがたく思っているのか」と言って、笑ったという。そして、この漱石の語学学習を通じての「感化」こそ、「私がドイツ語やフランス語を学ぶ際にも応用して大いにためになった」と述懐している。「私はこの夏目式のあるドイツ語の先生はまるで重箱の隅をほじるようなものだ」と笑ったが、私はこれをもって一生研学の方針としている」という言葉は重い。というのも教育の「質」という側面を考えると、二年間でわずか三章しか進まなくても、量では測りきれない質を学びえたのではないか。要はそこから何を学び取るか、という学習者側の問題にかかってくる。漱石から教室においてこのように英語を教えられた学生は、若き日の真鍋嘉一郎（1878-1941）であった。真鍋はX線を「レントゲン」という名前で定着させ、理学療法のパイオニアとして「医聖」と呼ばれた大正期を代表する医学者である。漱石は作文の参考書として「J.M.D. Meiklejohnの*The Art of Writing English*とM.C. Dixonの*English Composition*をあげ」たというが、「これを読んで非常に為になった」という。大正天皇の主治医であった真鍋は漱石の主治医でもあった。胃潰瘍を悪化させた漱石を日々往診して、「ご自分の身が細るほど尽して」（夏目鏡子『漱石の思ひ出』）くれ、漱石の最期を看取った。

こうした漱石の英語授業ぶりはある程度まで再現できるのではなからうか。たとえば真鍋を介して教壇の漱石をよく伝えた挿話がある。松山中学講師として漱石が英語の訳をつけていると、生徒のひとりが立って、「先生、それは違います」と詰問したところ、漱石が「なぜ違う」と反問した。生徒は「字引には別の譯があります」と応えたという。生徒の抗議に漱石は「サツと色を作したが」、徐ろに口を聞いて「そんな虚言が書いてある字引は直して置け」と応じたという。辞書を神の言葉のごとく信奉していた生徒は、驚きを通り越してしまい、「字引を直す先生」とあがめ、「夏目さんの評判は一層に高まった」のであった。この一文は国民新聞の記事を転載しているのだが、当時生徒の一人であった某博士がとあるが、この某博士こそ、若き日の真鍋であった¹⁵⁾。

「辞書には別の意味があるが…」と生徒から追求されて、漱石ならずとも虚を突かれぬ英語教師はいまい。だが、「辞書を訂正しておけ」と言い放つことができる教師はなおさう少ないのではないか。同時にこ

の挿話は漱石が自分の読解力に対して絶大な自信を誇示しているようにも思えるが、英語教師としての漱石は必ずしもこうした自信の塊ではなかったようである。漱石が一高で英語を教えていたとき、「一人の学生が訳をつけながらちょっと行き詰まった時、『先生、この字は何と譯をつけますか』と聞くと、『何、君そんな字を知らないのか』と鸚鵡返しにやつつけられた」ので、生徒はひどく面喰い赤面してしまった。すると漱石は、「実は僕も知らない、字引を見ようとすまして字引を引き出した」という。教師、漱石の実直な人間性があるふれていて思わず破顔一笑をさそうような挿話である¹⁶⁾。漱石にとっては、この辞書引くということが学習の一過程であったのだ。

さて、『ヘルプス随想録』を「教室に講ずること十数回」という本田増次郎の翻訳書『処世要訓』（明治35年）をはじめとして、明治後期から大正、昭和初期にかけて、教室で英語の講読用教材として採用され、盛んに講じられていた。大正13年にヘルプスの『エッセイ』は、教科書として北星堂から出されるのだが、編纂者であった清水起正が校正刷をチェックしていると、山口の奈倉教授から、「倫敦マクミラン社出版の註釈付の*Helps's Essays*のなかには舶来本に似合わぬ由々しい間違いが二箇所もあるのに、大抵の人々にはそれが気付かれぬらしい」と疑義がはさまれたところから「誤植論争」の端を発する。すでに正則英語学校の高等科で「本書を教科書として使用し充分熟読玩味する機会があったはずの私は遂に左様の間違いに心付かず講了してしまった」と、編注者、清水はあわてて当該箇所を再検討するところとなった。ここで言及されている「倫敦マクミラン社出版の註釈付の*Helps's Essays*」とは、漱石が教科書にした底本と同じものである¹⁷⁾。『ヘルプス随想録』のなかにある誤植をめぐり、長谷川康が「清水起正氏へ」という一文をしるし、自説を展開するところとなった。

こうした清水、長谷川の間で交わされた解釈をめぐる「論争」の末尾に、「高等高師の石川林四郎氏は古くより*Helps's Essay*を教科書に採用し、毎年購読されているが七、八年前、氏の講義を聞いた人のnoteにも第一の問題たる*their being*は*there being*と訂正すべしとあるそうで、氏は今でも*there*を主張しているとのことである」と編集者が追記をしている。この編集者は喜安雄太郎（1876-1955）であり、明治37年に『英語青年』の編集者になり昭和19年までこの雑誌の経営編集を行った。

だが、ヘルプスの教科書のなかに生じた誤植問題は

意外なかたちで決着をみることになった。澤村生の名前で寄せられた「清水起正氏の疑義について」という一文がすべてを解決した。「清水氏の提出された their と not の問題は、今から数年前私が名古屋で Helps を教えていた時分、やはり変に思ったので外人にも質した上、私が八高用として編纂した教科書に“On the Exercise of Benevolence”を採録する際には、their を there と独断ながら訂正して置きました（大正三年九月、第八高等学校編纂発行、*Help' [sic] Essays*, p. 54）」という証言から、『ヘルプス随想録』が英語の教材として大正初年には全国広く使用されていたことが判明してくる。しかも各学校において教師がヘルプスの文章を独自に編纂して、授業用の教科書として使っていたのである。漱石が編纂した教科書にも編纂者の名前が明記されていなかったように、これらの教科書にもほとんどが編者の名前は記されていない。これが慣用であったのである。そして、この誤植には誰もが悩まされたとみえて、英国で見つけた『ヘルプス随想録』のなかで、「ちょうど例の個処が、別々にあるが訂正してある。殊に面白いことには、there の訂正してある方が古本には、not の下に誰かが underline をしている」と報告されている。誤植による混乱は何も日本だけの状況ではなかったようだ。

さて、澤村生とは、澤村寅二郎（1885-1945）のことだが、ヘルプスの他の本も参照して、「their の訂正は、*Essays and Aphorisms* by Sir Arthur Helps (p. 24) Scott Library, London」とただし、さらに「not の訂正は、Arthur Helps, *The Transaction of Business* (Chicago: Forbes, 1913), p. 34」を実見したと丁寧に指摘し、ヘルプスの誤記ではなく、印刷上の誤植に過ぎなかったことが判明した。篤学の士により、この罪な誤植から生じた解釈上の問題は解決をみることになったわけである¹⁸⁾。

昭和20年7月7日の甲府空襲により澤村は戦災死したのだが、『英語青年』では追悼特集が編まれた。そのなかで澤村の英語授業は、「英語教授における工夫と努力はシェイクスピア対訳の妙と並んで、氏の多彩な生涯を飾るものであろう」とまで称揚されている。『ヘルプス随想録』を教材として用いていた八高の授業の模様を教え子の一人が伝えている——「（大正10年欧米留学して）帰朝早々だけに発音がきれいであった。…澤村さんの強みは英語学でも英文学でもない、英語に対する気味悪いほどの勘であった。それは翻訳や註釈に表しきれない、以心伝心的なものであった。澤村さんは『to think in English は古い、僕は to feel in

English だ』と言われた」。教師と生徒が一体となり白熱した授業風景が浮かんでくるようだ。ただ、「澤村さんは晩年 English through English の教授法を唱導し実行された。しかしその時から授業が学生にとって味の無いものになった」そうである。英語の授業は難しい。「語感を脱ぎ棄てた裸の英語は、澤村さんの直観力を生かす道ではない」と言うのが教え子の教師に対する評価であった。「語感を脱ぎ棄てた英語」というとらえ方には少なからず抵抗を覚えるが、ラスキン、マッコレー、ステイーヴンソンなどとともに、ヘルプスは教材としてとりあげられたのだが、漱石を高く評価していた澤村は果してどのようにヘルプスを教えていたのであろうか。

『英語青年』の新刊案内には、北星堂から発行された清水起正が編纂したヘルプスの教科書があげられている。Help's Essay と誤記された見出しのもと、「Arthur Help の Essays Written in the Intervals of Business を抜いて教科書用としたもの高等学校の諸学校にもってこいの教科書である」と案内文には謳われている¹⁹⁾。広告文を書いた雑誌記者はヘルプスを Help と思い込んでしまっている。どうやら、どこまでも誤記問題は揺曳していくようだ。

最後に、最近、発掘され、本稿で論じてきた二点の文献から波及するであろう研究動向を指摘しておきたい。『ヘルプス随想録』は英語の教科書として翻刻された。そしてほぼ2年後に書かれた「アーサー・ヘルプスの論文」は、『随想録』の序文、編中の一章を翻案・翻訳したものであり、『英文学評論』のなかで論評されたイギリス文学の諸作品からの英語引用文につけられた、膨大な数にあがる漱石の訳文とともに、漱石の翻訳の初期的な例を示すものとして価値をもち、翻訳研究に寄与するであろう。そして同時にこの二点は漱石が英語教育に対して、どのような態度で接していたかを示唆する文献でもあり、現在の分化した英語教育を再考する一指針になるはずである。さらにヘルプスと漱石をヴィクトリア朝後期という共通基盤のなかにおいてみるとき²⁰⁾、比較文学研究、イギリス文化研究の豊かな沃土がみえてくるであろう。

注

- 1) 長島裕子「漱石が翻刻した英語の教科書——丸善発行のアーサー・ヘルプスの文集」（『図書』〔岩波書店、2016〕、11月号、pp. 12-17。『丸善百年史 資料編』（丸善、1981）、p. 381。岡恵理「吾輩の翻訳である」（朝日新聞、2016年10月31日、朝刊）。また翻訳の冒頭部が

- 同デジタル版に掲載された (<http://digital.asahi.com/articles/photo/AS20161026004100.html>).
- 2) 村田由美『『漱石全集』未収録「アーサー・ヘルプスの論文」について』（『総合文化誌 KUMAMOTO』〔熊本文化振興会、2016〕、15号）、pp. 49-53.
 - 3) ヘルプスは人間的な資質により、ヴィクトリア女王夫妻の信認を得ていたのである (Theodore Martin, *The Life of His Royal Highness, The Prince Consort* [Smith Elder, 1880], Vol. 5, p. 113.)。デイズレリーは、女王のスコットランド日記を興味深く読み、感動した旨を編者ヘルプスに伝えた (W. F. Monypenny and G. E. Buckle, *The Life of Benjamin Disraeli* [John Murray, 1929], vol. 2. pp. 389-90.)。ヘルプスと王室の関係については次の書評を参照のこと (A. Helps, "Life of Prince Consort," *Quarterly Review*, vol. 138 [January 1875], pp. 107-38.)。ラスキンとの関係については, J. R. DeBruyn, 'John Ruskin and Sir Arthur Helps [pts 1-2],' *Bulletin of the John Rylands University Library*, 59 (1976-7), pp. 75-94, pp. 298-322. を参照のこと。
 - 4) ヘルプスとヴィクトリア朝文学との関係については、ヘルプスのディケンズ追悼文を参照せよ (A. Helps, "In Memoriam," vol. 22 [July, 1870], pp. 236-40.)。また、ヘルプスの文学的特質を論じた J. S. ミルの書評も必読である (J. S. Mill, "Aphorisms: Thoughts in the Cloister and the Crowd by Arthur Helps," *London and Westminster Review*, vol. 4 and 26 [January, 1837], pp. 348-57.)。以下の文献はヘルプスが催したサロンの精神性の一端を知ることができる (A. Helps, "On the Art of Dinner-giving," *Cornhill Magazine*, vol. 19 [May, 1869], pp. 555-67.)。
 - 5) E. A. Helps ed., *The Correspondence of Sir Arthur Helps, K.C.B., D.C.L.* (London: John Lane, 1907), pp. 1-18.
 - 6) *Ibid.*, pp. 15-16.
 - 7) 『ヘルプス随想録』の初版は、1841年、ピッカリング社より出版されたが10年間で5版を重ねている。1899年、「マクミラン版英文学古典叢書」に加えられ、装幀も二種類あり、以後10版以上も版を重ねている。漱石の使用した版は1890年版である。この叢書は英語学習用に注釈をつけて編纂されているが、ジョン・モーレーが編纂した『英国文人叢書』と酷似する精神性をもっている。
 - 8) "quiet smoothness" というヘルプスの文体に対する評価は、ヘルプスが書く英語に対してラスキンが下した "beautiful quiet English" という評語からきている (*Modern Painters*, 1856, III, p. 268)。Arthur Helps, *Essays Written in the Intervals of Business* (London: Macmillan, 1903), pp. viii-xv. ヘルプスの本書はヴィクトリア朝の読者層から好意的に受け容れられた (W. H. Smith, "The Essays of Mr. Helps," *Blackwood's Magazine*, vol. 70 [October, 1851], pp. 379-91.)。Charles Kingsley, "Mr. Helps as an Essayist," *Macmillan's Magazine*, vol. 25 [January, 1872], pp. 200-5. などの書評を参照。
 - 9) Arthur Helps, *Essays Written in the Intervals of Business* (London: Macmillan, 1903), pp. 31-33. 夏目金之助「アーサー・ヘルプスの論文」『保恵会雑誌』49号 (愛媛県尋常中学校保恵会、明治29年2月), pp. 23-26.
 - 10) 夏目漱石「語学養成法」『漱石全集』(岩波書店、1996), pp. 391-400.
 - 11) とくに「語学養成法」, pp. 397-400. を参照のこと。
 - 12) 「語学養成法」, pp. 391-92.
 - 13) 「漱石氏と辞引」『英語青年』XXXVI (大正6年1月1日), p. 215.
 - 14) 「漱石と真鍋國手」『英語青年』XXXVI (大正6年2月1日), p. 286.
 - 15) 「漱石氏と辞引」『英語青年』XXXVI (大正6年1月1日), p. 221.
 - 16) *Ibid.*
 - 17) 『英語青年』LII (大正12年6月15日), pp. 175-76.
 - 18) 『英語青年』LII (大正12年7月1日), p. 238.
 - 19) 『英語青年』LIII (大正13年6月1日), p. 185.
 - 20) Stephen L. Keck, *Sir Arthur Helps and the Making of Victorianism* (Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2013). とくに第8章 (pp. 190-228) を参照のこと。
- 図版出典: John R. DeBruyn, "Arthur Helps," *Oxford Dictionary of National Biography* (Oxford: Oxford University Press, 2004), vol. 26, p. 269.

アーサー・ヘルプス主要著作

- Brevia; Short Essays and Aphorisms* (1871)
Casimir Maremma (1870)
Catherine Douglas; a Tragedy (1843)
The Claims of Labour (1845)
Companions of My Solitude (1851)
Conquerors of the New World and Their Bondsmen (1848-52)
Fruits of Leisure (1852)
Conversations on War and General Culture (1871)
Essays Written in the Intervals of Business (1841)
Friends in Council: A Series of Readings and Discourse Thereon (1847-1859)
Ivan de Biron; or, Life at the Russian Court in the Middle of the Last Century (1874)
Life and Labours of Mr. Thomas Brassey (1872)
Organization in Daily Life: An Essay (1862)
Oulita the Serf (1858)
Realmah (1868)
Some Talk about Animals and Their Masters (1873)
Thoughts in the Cloister and the Crowd (1835)
Thoughts upon Government (1872)
Social Pressure (1875)
The Principal Speeches and Addresses of His Royal Highness the Prince Consort (1862)
Queen Victoria, Leaves from the Journal of Our Life in the Highland (1868)
E. A. Helps ed., *The Correspondence of Sir Arthur Helps, K.C.B., D.C.L.* (1917)